

2019年2月14日

関戸冬彦 博士学位（論文博士）審査報告

審査委員長 Michael Pronko

標記の博士学位審査請求に関し、専門審査委員会では論文審査及び口述試験を行った結果、全員一致で合格と判定しましたので、ここにご報告します。

請求者氏名: 関戸冬彦

論文名:

Integrating Literature Studies and Language Learning at Japanese Universities

『日本の大学における文学教育と英語教育の統合』

専門審査委員会委員長 Michael Pronko (文学部教授)

専門審査委員 松本一裕 (文学部教授)

専門審査委員 Charles Browne (文学部教授)

専門審査委員 貞廣真紀 (文学部准教授)

I 審査内容

1. 論文の構成

関戸冬彦氏の論文博士学位申請論文 *Integrating Literature Studies and Language Learning at Japanese Universities* は195頁からなり、標準的な学術論文の形式に則り、博士学位論文としての体裁が整えられている。

2. 論文の評価

(1) 論文の概要

関戸冬彦氏の論文 *Integrating Literature Studies and Language Learning at Japanese Universities* は日本の大学における文学教育と英語教育の統合の可能性を考察するものである。英語学習教材としての文学テキストの使用が、学習者のモチベーションを高めるとともに英語運用能力を向上させ、さらに、異文化理解を深める目的にいかん資するかという問題を、理論と実践の両方の側面から検証している。

(2) 論文の内容

本論文は5章によって構成されている。

Introduction

Chapter 2: Review of Literature —Previous Research and Studies

Chapter 3: Ten Key Points for Language Education and Literature

Chapter 4: Usable Methods

Chapter 5: Conclusion

第1章では、実用英語が重視される今日の英語言語教育の現場で分離される傾向にある英語教育と英文学教育の関係を、明治時代にさかのぼって検証し、日本の英語教育で長く行われてきた“yakudoku”の発生とその問題、政府の方針等を歴史的観点から概観している。

第2章では、EFLの現場における文学テキストの重要性を論じた15本の先行研究を概括している。その結果、文学テキスト活用の教育的効果として以下の4点が抽出される傾向にあることがわかった。「モチベーション」、「経験」（登場人物の経験を現実世界の経験と結びつける、共感能力など）、「言語習得」（メタファー理解、ボキャブラリ強化）、「教育的方法論」（スロー・リーディング、文化理解）がそれである。

第3章では、第2章で抽出された効用「モチベーション」「経験」「言語習得」「教育的方法論」をさらに細分化し、学生のモチベーションの向上と英語力強化に文学のどのような点が有益なのかを、「ヒューマニティ」「共感能力」「メタファー理解」「ボキャブラリ」「ディスカッション能力」「スロー・リーディング」「文化理解」など、10のキーワードで検証する。文学テキストの使用は、いわゆる実用英語以上の、抽象的な概念の運用能力や、批判的かつ創造的な思考力を習得する上で有益であり、学習のモチベーションを向上させるのに有益であると結論している。

第4章は、文学ジャンルを短編小説、小説、詩、劇に分け、言語習熟レベルが教材のコンテンツの英語レベルより低い場合、具体的にどのような教材を扱い、授業をどのように運営すれば学習者の意欲を維持させるのに効果的か、それぞれのジャンルに即して、関戸氏自身の経験を踏まえた実践例を提示している。

第5章は論文の内容を総括するとともに、今後の日本の英語言語教育にどのような改革が必要かについての大局的なビジョンが提示される。日本では長く“yakudoku”が行われてきたが、それにとどまらないアクティブ・ラーニングの実践例を教員が他国の教育実践から学ぶことが望ましく、従って、英語教育における文

学の活用は、教員養成の問題としても考察される必要があるということ、また、大学カリキュラム全体としても検討が必要であることが指摘されている。

(3) 論文の評価

本論文は、日本の大学の英語教育現場において文学を用いることにどのような意味と効果があるか、また、具体的にどのようにすれば文学テキストが英語運用能力の向上に資するのか、教室の英文学の問題を理論と実践の面から考察した実証的かつ実用的な研究である。関戸氏は、文学テキストを「英語が難しすぎる」という安直な理由で放棄するのではなく、逆に、問題とされてきた“yakudoku”を無批判に採用するのでもなく、複雑なテキストに対して学生がモチベーションを維持しかつ学習効果をあげるためのよりよい「方法」はどのようなものかを検証し、クラス内活動について具体的提言を行うという重要な仕事を行なっていると言えるだろう。英語や英文学を教える高校や大学の教員が教室で日々直面する問題を正面から考察している点で、本研究の実証性と実用性は評価に値する。

一方で、論文には限界もある。1点目として、論文中で使用される「ヒューマニティ」や「「本物の」(authentic)なテキスト」といった用語や概念は、歴史的に意味の変化が著しい包括的なタームであり、詳細な定義が必要であったと思われるが、本論ではこうした用語は比較的安易に用いられ、厳密なフォーカスが定まっておらず、やや議論が恣意的に展開していたこと、また、現場の教員がそうしたタームや概念をどのように理解するかに適応の方法が任されてしまう不安が残った。しかし、用語の扱いについては最終試験の中で関戸氏から十分な解答を得ることができた。

また、2点目に、授業内活動案については論文中でも多くの紙面が割かれているが、中心的に論じられているのは「1回ないし数回の授業単位」での教育実践であり、「1 Semester」あるいは「1年」、「複数年」といった中長期的なカリキュラムの展開や効果についての議論は、最後のセクションで大局的なビジョンがわずかに言及されるのにとどまり、検証が十分に行われているとは言えない。

しかしながら、問題を解消するための提案まで至らなかったとはいえ、長期的な問題点の指摘をわずかでも行なっていることは評価されるべきであり、また、カリキュラムおよび教員養成について現実的かつ有効な提言を行うことは、一本の論文で扱える議論の範囲をはるかに超えているとも言える。長期的な教育実践の問題については、関戸氏の今後の研究の展開の中でさらに検証されることを期待すべきだろう。

以上より、当審査委員会は本論文について、博士論文として十分な水準に到達しており、博士号を授与するに値するとの結論に至った。

II 審査結果

本論文は、2018年9月14日、関戸冬彦氏により博士学位申請論文と論文審査願が提出され、学長より文学研究科への審査の付託があり、主査 Michael Pronko 教授、副査松本一裕教授、Charles Browne 教授、貞廣真紀准教授の4名からなる専門審査委員会が立ち上げられた。最終試験（口頭試問）は2019年1月18日、16時から17時30分までヘボン館で行われた。

審査委員会は全員一致で、関戸冬彦氏の博士学位請求論文の合格を決定し、文学研究科委員会に報告した。文学研究科委員会では、専門審査委員会の結果を受け、2019年2月14日、合否を審議し、合格が承認された。